The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「陽明文庫蔵『源氏物語』校注・訳（一）：桐壺巻」
Author(s)	瓦井, 裕子; 松本, 大
Citation	詞林. 2021, 69, p. 1-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79221
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

https://doi.org/10.18910/79221　詞林　第69号　2021年４月

陽明文庫蔵『源氏物語』校注・訳（一）――桐壺巻――

瓦井裕子・松本大

■前言

本稿は、公益財団法人陽明文庫蔵『源氏物語』（重要文化財指定。以下、陽明文庫蔵本とする）を底本として、新たな校訂本文と現代語訳、及び読解上必要となる最低限の引歌・典拠等の指摘を提供するものである。

当該本の基礎的事項については、陽明文庫叢書において詳細な報告がなされているため、本稿では省略する。ここでは、当該本の書写年代と本文の性格についてのみ触れておきたい。先行研究においては、おおよそ以下のような見解が定着している。

この五十四帖の伝本は、その本文・外題の筆蹟、表紙・本文の料紙その他から判断して、鎌倉時代中期の書写と見られている三十四帖を基幹とするもので、この諸帖の本文は青表紙本でも河内本でもない別本とみなされている。これに鎌倉時代後期乃至は吉野時代にかかるころの書写かとみられている諸帖（別本五帖、青表紙本十二帖）と、江戸時代（寛永～寛文ごろか）の補写本三帖（青表紙本系統）とを加えて五十四帖を構成している。[1]

右のごとく、鎌倉期書写の帖を数多く有し、かつその本文が別本であると判断されることから、例えば、池田亀鑑氏が『校異源氏物語』『源氏物語大成』に採録し、また『源氏物語別本集成』では底本に用いられるなど、別本の中でもとりわけ注目されてきた。平安期の写本・断簡が残らない『源氏物語』にあって、鎌倉期本文は平安期本文の様相を浮かび上がらせる可能性を持つ。その重要な一資料と目されるのが、当該の陽明文庫蔵本なのである。

しかしながら、定家本系統の本文に強く依拠する現状の『源氏物語』研究にあっては、陽明文庫蔵本の物語世界が十分に理解・流布されているとは言いがたい。

そこで本稿では、この研究状況を改善すべく、当該本の校注・訳を新たに作成し、一案として提示する。本稿が、定家

本・河内本の成立以前の段階における、『源氏物語』享受の実態解明の一助になれば、幸いである。

■桐壺巻の書写状況に関して

桐壺巻への調査の結果、本文の訂正について明らかになった点を指摘しておきたい。

桐壺巻では、重ね書き・擦り消しによる訂正、ミセケチ、補入など本文の訂正が行われている。このうち、重ね書きと擦り消しはすべて書写者と同筆と認められ[2]、書写と同時に行われたと見られる。これらの箇所は、訂正前の本文を視認できる場合が多く、それらを見るに、単なる書き間違いとその訂正の域を出るものではない。この巻の書写者は、書写中に誤りに気付いた場合、基本的には重ね書きによる訂正を行い、重ね書きによって判読が困難となる場合には、擦り消して新たな文字を書く、という姿勢であったと思しい。

補入も本行本文と同筆と認められる。墨色はやや異なるため、書写を終えた後に校閲を行い、書き落としている語句を補入したものと思われる。他本と校合の痕跡とも考えられるが、大きな異同が頻出する訳ではないため、現段階ではその可能性は低いと考えている。

問題となるのはミセケチである。ミセケチは桐壺巻において三種が認められる。

第一種[3]は、墨色が本行本文と同一であるため、書写者がその場で誤りに気付いた場合のものと把握される。文字の削除のみを目的とし、文字の訂正や補入は行われない。

第二種[4]は、本行本文とは墨色が異なり、書写後の所為かと考えられる。いずれの箇所も誤写が疑われる部分に見え、これも他本との校合の結果ではないと判断される。また、第一種と同じく、文字の削除のみを目的とし、削除後の訂正や補入は行わない。本文書写者による所為か否かは判断しがたいが、先述した補入の態度を見るに、本文書写者によるものであろうか。この場合、ミセケチの性質としては、第一種と同様ということになる。

第三種は、墨色・ミセケチの形状・文字削除の性質・傍記の有無といういずれの点においても、第一種・第二種とは異なる。第三種と認定したミセケチ三例のうち二例は、次のように、元の本文でも意味が通る箇所にミセケチを付した上で、新たな本文を傍記する。二重線はミセケチ、〔　〕内は傍記を表す。

①日々に~~まま~~〔をも〕りていとよはくなりたまひぬれは（五ウ）

②心のをさまら~~ぬ~~〔さりける〕ほと、御らむしゆるす（一七オ）

①、削除前の本文のように、桐壺更衣の病状を「まさりて」とするのは、陽明文庫蔵本の独自本文である。これがミセケチと傍記によって、諸本と同様の「をもりて」に変更されて

いる。また、②、削除前の本文「をさまらぬ」は、陽明文庫蔵本と国冬本だけが持つ本文である。これが、ミセケチと傍記によって「をさまらさりける」という、大半の諸本「おさめさりける」に近い本文に変更される。他本との校合の結果である可能性がある。

前述のように、桐壺巻の本文書写者が誤字を訂正する際には、基本的に重ね書きか擦り消しを行う。ミセケチを付した上で新たな本文を傍記するのは、この第三種に属するミセケチ・傍記の組み合わせしかなく、この点からも、本行本文の書写者と同筆でないことが窺われる。

また、もう一例は文字の削除のみで傍記はないものの、校合の可能性がある。

③をとなひ給てのちはありしやうにもみすのうちなとにもいりたまはす（三二ウ）

削除前の「ありしやうにも」の本文を持つものとして、河内本系統の諸本、別本の各筆源氏、麦生本がある。一方、定家本系統の諸本はいずれも訂正後の本文と同様、「ありしやうに」の本文を持っており、当該箇所の訂正は、単なる誤記の訂正ではなく、異なる伝本との校合の結果である可能性がある。ただし、三箇所という限られた判断材料しかないため、現段階では詳細は不明と言わざるをえない。後考を俟ちたい。

以上のような本文修正の様相から、校訂本文をたてるにあたって、重ね書き・擦り消しによる訂正・補入については、すべて訂正後の本文を採用した。ミセケチについては、第一種・第二種は訂正後の本文、第三種は訂正前の本文を採用して校訂本文をたてた。本文の修正については、いずれの場合も校訂付記に掲出した。

注

（1）阿部秋生「陽明文庫本源氏物語について」（財団法人陽明文庫編『陽明叢書国書篇第十六輯　源氏物語　一』思文閣出版　一九七九年）

（2）ただし、一例のみ疑問を残す。

（3）以下の四例がこれにあたる。「たまのをとこみこ侍さへ」（二ウ）、「わりなくまとはさせ給あまり」（三オ）、「御けしきを見たてまつる止うゑ人女房なと」（一八ウ）、「丶（は）いせんにさふらふ人〳〵なといと心くるしう見たてまつりなやむ」（一九ウ）。

（4）以下の三例がこれにあたる。「あやしと見たてまつり給よろしき事たにか丶るわかれのかなしからぬやうはなきわさなれは」（七ウ）、「やまとゑことの葉にも丶ろこしのうたをも」（一六オ）、「をもしろき所なりけるを心と丶いと丶いけの心ひろく」（三三ウ）。

■凡例

一、陽明文庫蔵源氏物語桐壺巻を底本とし、上段に校訂本文を、下段に現代語訳を掲出した。

一、本文は、底本に可能なかぎり忠実であることを心掛けたが、意味が通じないところは最小限の校訂を行った。その場合は、校訂付記にその詳細を記した。また、疑義が残る箇所についても、校訂付記にその内容を示した。

一、本文の作成にあたって、以下の校訂操作を行った。

1　変体仮名はすべて通行のひらがなに、仮名遣いは歴史的仮名遣いに改めた。踊り字については、これを用いず、該当する文字を直接示した。

2　漢字は、新字体で表記した。異体字・略字等は、通行の字体で示した。

3　底本に付されている見せ消ちは、第一種・第二種については、これを反映させ、訂正後の本文を採用した。第三種については、これを反映させず、訂正前の本文を採用した。

4　誤字や脱字等の誤りがある箇所は、それが明らかな場合にのみ、訂正を加えた。

4　底本の表記を改めた箇所には、底本の表記をルビとして掲げた。

5　内容把握の利便性を考慮し、適宜、濁点、句読点を加え、会話文には「　」を付した。また、適宜、章分け・段落分けを行った。

一、現代語訳については、底本に即して訳すことを原則としながら、現代語として意味が通るように心掛けた。

一、注釈には次の資料を使用した。

『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『古今和歌六帖』『伊勢集』……『新編国歌大観』（日本文学Ｗｅｂ図書館）

※ただし、以下によって異同を確認した。典拠としてよりふさわしい本文が見出された場合は、その旨を記した上でそちらの本文を示した。

『古今和歌集』……加藤洋介氏の古今和歌集校異データ（未公開）

『後撰和歌集』……小松茂美『後撰和歌集校本と研究』（誠信書房一九六一年）、大阪女子大学国文学科国文学研究室編『後撰和歌集総索引』（大阪女子大学　一九六五年）

『拾遺和歌集』……片桐洋一『拾遺和歌集の研究　校本篇　伝本研究篇』（大学堂書店　一九七〇年）

『古今和歌六帖』……書陵部蔵桂宮本　宮内庁書陵部編『図書寮叢刊　古今和歌六帖　上巻・本文編』（養徳社　一九六七年）
『伊勢集』……秋山虔・小町谷照彦・倉田実『日本古典評釈・全注叢書　伊勢集全注釈』（KADOKAWA　二〇一六年）
「長恨歌」……平岡武夫・今井清校定「長恨歌」（石田穣二・清水好子校注『新潮日本古典集成　源氏物語一』新潮社　一九七六年）
「長恨歌伝」……袴田光康「『源氏物語』における「長恨歌伝」の研究―「桐壺」巻篇其の一（付　金沢文庫本「長恨歌伝」）」（『文芸研究』第九一号　二〇〇三年九月）
『荘子』……市川安司・遠藤哲夫『新釈漢文大系　荘子（下）』（明治書院　一九六七年）
『源氏釈』……中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊　源氏釈　奥入　光源氏物語抄』（武蔵野書院　二〇〇九年）
『紫明抄』……京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学国語国文資料叢書　紫明抄　上　京都大学蔵』（臨川書店　一九八一年）

【1】帝、桐壺更衣を寵愛して世間の非難を受ける

いづれの御時にか、女御、更衣、あまたさぶらひたまひける中に、いとやんごとなき際にはあらぬが、すぐれてときめきたまふおはしけり。はじめより、われはと思ひ上がりたまへる御方々は、めざましきものに思ひおとしめ、そねみたまひける。それより下臈の更衣たちなどは、朝夕の宮仕へにつけつつも、安からぬこと多く思ひ積むるままに、人の心を動かし、嘆き覆ふ積もりにや、いとあづしうなりゆきて、もの心細げに思ひ、里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人の謗りをも憚らせたまはず、世の例ともなりぬべき御もてなしなり。

上達部、上人などもあいなう目を側めつつ、「いとまばゆき人の御おぼえかな。唐土にもかかることの起こりにこそ世は乱れ、悪しきことも出で来けれ」ともて悩むほどに、やうやう天の下のあつかひ草になりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ざしの類なき一つを慰めにて、交らひたまふ。

父の大納言亡くなりたまひて、母北の方なんいにしへのよしある人にて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、何事の折ふしにもも

【1】どの御代のことだったか、女御や更衣が多くはべっていらっしゃった中に、それほど貴い身分ではない方で、際立って帝寵を受けていらっしゃるお方がおいでになった。入内当初から、「自分こそは」と自負なさっている女御の方々は、目ざわりな存在だと見下し、嫉んでいらっしゃった。それよりも身分の低い更衣たちなどは、朝夕の宮仕えにつけても穏やかでない感情を多く積もらせるままに、更衣は他人の心を乱し、嘆きをあまねく行きわたらせたせいか、たいそう病がちになっていき、心細く思って、里に下がることが多いのを、帝はいよいよ尽きることなく愛おしい人とお思いになって、他人からの謗りをも憚られず、先例ともなるに違いないお扱いである。

上達部や殿上人なども不都合なことと横目で見ながら「まこと見るに堪えないご寵愛よ。唐土でもこのようなことが発端となって、世は乱れ、ひどい事態が起こったのだ」と悩んでいるうちに、しだいに天下の話題の種となって、楊貴妃の例までも引き合いに出すほどになっていくので、更衣にとってはじつにいたたまれないことも多いのだが、畏れ多いご寵愛の類ないこと一つを慰めとしてお仕えしている。

更衣の父の大納言はお亡くなりになっていて、母である北の方が古くからの雅趣を備えた人で、両親がそろっていて、

一「京師長吏、為之、側目。（京師の長吏、之が為に目を側む。）」（長恨歌伝）

てなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見もなければ、こととあるときはなほ拠り所なう、心細げなり。

【2】桐壺更衣、皇子を出産

(一)前の世にも御契りや深かりけん、世になくき(3)よらなる玉の(4)をとこみこ男皇子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせてご(5)御覧ずるに、めづらかなる児子の御容貌なり。

一の皇子は右大臣殿の女御の御腹にて、世のおぼえ重く、疑ひなき儲けの君と世人もてかしづきこゆれど、この御匂ひにはならびたまふべくもあらざりければ、大方のやんごとなき御もてなしばかりにて、この宮をば私物に思しかしづきたまふこと限りなし。

母君は、はじめよりおしなべて内裏宮仕へしたまふべきにもあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしくて、わりなくまとはさせたまふあまりに、(6)さるべき御遊びの折々をはじめ、何事にもゆゑありよしよししき方には、目下世評の華やかなお方たちにもそう劣らず、何事につけてもお取り計らいになるけれども、とりたててしっかりとした後見もないので、大切な行事があるときには、やはり拠り所がなく心細そうである。

【2】前世でもお約束が深かったのだろうか、世にまたとなく美しい、玉のような男皇子さえお生まれになった。帝はいつ対面できるかと落ち着きになられず、急き立てて参内させてご覧になると、並外れた皇子のお顔だちである。

一の宮は右大臣の娘である女御がおあげになった方で、世間からの扱いも重々しく、まちがいなく春宮になられる方だと世間の人々は大切にお世話申し上げているが、この若宮のご美貌にはお並びになるべくもないので、帝は並一通りの丁重なお扱いをされるだけで、この若宮こそ自分だけの大切な子として愛育なさることこの上もない。

若宮の母君は、もとより並々の宮仕えをなさるような方ではなかった。世の信望を集め、いかにも貴い方のように見え、むやみにお側にお置きになるあまり、しかるべき管弦の御遊びの折々をはじめとして、何事につけても趣があり風情に満

一「因自悲曰、由此一念又不得居此、復堕下界、且、結後縁。或為天、或為人、決再、相見好合、如舊。（因て、自ら悲しみて曰く、此の一念に由って、又此に居ること得まじ。復た下界に堕って、且、後の縁を結ばむ。或るときは天と為り、或るときは人と為るとも、決って再び、相見て好合すること、舊きが如くあらむ。）」（長恨歌伝）

二「承歓侍寝無閑暇　春従春遊夜専夜（歓を承け寝に侍して閑かなる暇無し　春は春の遊びに従ひ夜は夜を専らにす）」（長恨歌）

かならず参上らせたまふ。[一]あるときには、大殿籠り過ぐして、やがて留めさせたまふなど、[7]あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この皇子生まれたまひて後には、[8]心ことに思しおきてたる気色なれば、「春宮にも、ようせずは、これを据ゑたてまつりたまふべきなめり」とささめく人々あるを、一の宮の女御はあさましく、胸潰れて、[9]さることもやと思し疑へり。人より先に参りたまひて、やんごとなき方の御おぼえなべてならず、御子たちもあまたおはしませば、この御方の御諫めをぞ、すこしわづらはしきことには思しめしける。

【3】桐壺更衣、帝寵のために恨みを負う

かしこき御蔭を頼みきこえさせながら、貶め疵を求めたまふ人々は多かるに、[一]わが身はか弱くはかなきありさまにて、なかなかなる物思ひをしたまふ人ぞ、いと心苦しげなる。

御局は桐壺なりけり。あまたの御方々を過ぎさせたまちた催しには必ずお召しになる。あるときには、お寝過ごしになり、そのまま次の日もお留めになるなど、周囲の目も気にせず御前から下がらせないお扱いをなさったので、自然と身分の軽い方にも見えたのだが、この皇子がお生まれになってからは、帝はご心中で特にお決めになっていることがあるようなので、「春宮にも、ひょっとすると、この若宮をお据え申し上げあそばすおつもりのようだ」とひそひそ言う人々がいるのを、一の宮の母女御はとんでもないことと胸が潰れ、「本当にそのようなことが起こるかもしれない」と疑念を抱かれている。他の妃たちよりも先に入内なさり、高貴で重々しい立場の方として帝が大切にされることは格別であり、所生の御子たちも多くいらっしゃるので、このお方が更衣に関するお振舞いをお諫めするのを、やや煩わしいことだとお思いであった。

【3】かたじけない帝寵をお頼り申し上げなさるものの、蔑み粗を探そうとなさる人々は多く、自身はかよわく儚い様子で、帝寵のためにかえって心を悩まされる更衣は、じつにお気の毒な様子である。

更衣の御局は桐壺であった。帝は他の多くの妃たちの御局を幾度も通り過ぎられ、絶え間ない御前渡りをなさるので、

一「春宵苦短日高起（春の宵苦短くして日高けて起く）」（長恨歌）
二「既出水、體弱、力微、若不任羅綺。（既に水より出て、體弱く、力微にして、羅綺にも任ざるが若し。）」（長恨歌伝）

ひつつ、ひまなき御前渡りに、多くの人々〈の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきるときは、ここかしこの馬道、打橋、渡殿などやうの道にもあやしきわざをしおきつつ、御送り迎への人の裳、衣の裾、堪えがたくまさなきことどもさへあり。ある時には、え避らぬ道の戸を鎖し固めなど、こなたかなた御心を合はせてはしたなめ、わづらはしたまふときもあり。

ことにふれて苦しきことのみ数知らずなりまされば、いといたう世を思ひわびたるを、いとどあはれとご覧じて、後涼殿にもとさぶらひたまふ更衣の局をほかに移させたまひて、上局に賜はす。これにつけても〔10〕聞きにくきことども多くて、ましてこの恨み、やる方なし。

【4】皇子の袴着の儀

この皇子、三つになりたまふ年、御袴着のことあり。一の皇子のたてまつりしに劣るけぢめなく、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじきよらをせさせたまへば、それにつけてもまた世の謗り多かれど、この皇子のやうやうおよすけおはする御容貌、ありさま、世にありがたく、めづらかなるまで見えたまへば、見たてまつるかぎりの人々〈多くの妃たちが御心をすり減らされるのも、本当にもっともなことと思われる。更衣が帝のもとへ参上される際にも、それがあまり頻繁なときには、あちらこちらの馬道、打橋、渡殿などのような通り路にもけしからぬ仕業をしておいて、更衣の送り迎えをする女房の裳や衣の裾が堪えがたく不都合なさまになることなどさえある。ある時には、どうしても通らなくてはいけない道の戸に錠を下ろしてしまうなど、あちらこちらの妃たちが示し合わせてみじめな思いにさせ、お苦しめになるときもある。

何かにつけて辛いことばかりが数えきれないほど増えてくるので、世間を大変苦しいものと沈みこんでいる姿を、帝はいっそう不憫だとご覧になって、後涼殿にもともといらっしゃる更衣の局を他所へお移しになって、桐壺更衣の上の局としてお与えになる。これにつけても聞き苦しいような誹謗などが多く、まして局を移動させられた更衣の恨みは晴らしようがない。

【4】この皇子が三歳におなりになる年に、袴着の儀式がある。一の宮のときに行われた儀式に劣るところなく、内蔵寮、納殿にある宝を尽くして、たいそう美々しく催されるので、それにつけてもまた世間の非難は多いけれども、この皇子がだんだんと成長していかれるお顔だちやご様子は世にも稀で、常人とは異なるようにさえお見えになるので、拝見する人々は皆、憎みきることがおできにならず、ものの道理を

はえ憎みあへたまはず、物の心知りたまへる人は、かかる人も世には出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かしたまふ。

【5】桐壺更衣、病を得て宮中を去る

その年の夏、御息所、はかなき御心地にわづらひて、まかでなんとしたまふを、暇さらに許させたまはず。年ごろは常のあづしさになりたまへば、御目なれて、「なほしばし試みよ」[11]とのみのたまはせて、五六日になるに、日々にまさりていと弱くなりたまひぬれば、母君泣く泣く暇奏してまかでさせたまふ。[12]かかる折にもあるまじき恥もこそと心遣ひして、皇子をば留めたてまつりて、忍びて出でたまふ。[13]

限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず。ご覧じだに送らぬいぶせさを言ふかたなく悲しと思しめす。いと匂ひやかに美しき人の、いたく面痩せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でてはきこえず、あるかなきかに消え入りつつ泣きたまふをご覧ずるに、来し方行く末思しめされず。[14]われも泣く泣くよろづを契りのたまはすれど、まみなどもいとたゆげにて、なよなよとわれかの気色なれば、いかさまにせんと思しまどふ。[15]輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひても、さらにえ許しやらせたまはず。「『限りあらん道にも遅れ先立たじ』とこそ契ご存じの人は、「このような人もこの世にお生まれになるものなのだ」とこちらがあきれるほどに目を見張っていらっしゃる。

【5】その年の夏、桐壺の御息所は病を得て弱々しい心地になり、里へ退出しようとなさるが、帝はまったく暇をお許しにならない。ここ数年はご不調が常のことにおなりだったので、帝はそういう状態に慣れておしまいになって、「このまま少し様子をみなさい」とだけおっしゃって、五六日がたつうちに、日を追うごとにひどくなり、たいそうお弱りになるので、更衣の母君は涙ながらに退出のお願いを奏上して、里に下がらせなさる。「このような折にとんでもない不名誉があってはいけない」と気配りして、皇子は宮中にお残ししてて、ひっそりと退出される。

掟があるので、帝はそのようにばかりも引き止めることがおできにならない。更衣をお見送りにさえなれない憂愁を言いようもなく悲しいとお思いになる。まこと匂いやかに美しい人が、たいそう面やつれてしまって、何とも悲しいとしみじみ思い入りながらも言葉にしては申し上げず、あるかなきかに消え入りそうになりながらお泣きになるのをご覧になると、過去のことも将来のことも考えることがおできにならない。ご自身も涙ながらに様々なことをお約束になるが、目つきなどもひどく力がなく、なよなよとして意識も朦朧として

りつるを、うち捨ててはさりともえ行きやらじ」と言ひもやらせたまはず、むせかへらせたまふ御さまを、女もいみじと見たてまつりたまひて、

「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

いとかう思ふたまへましかば」と息も絶えつつ、きこえまほしきことはありげなれど、いと苦しげにてむげに消え入るやうなれば、ただかくながら、ともかくもなりはてんをだに見果てんと思せど、修法あまた始むべきこと、さるべき人々うけたまはりたるも、やがてかしこにて今宵よりあるべければ、わりなく思しめしながら、まかでさせたまひつ。

【6】桐壺更衣、死去

御胸つとふたがらせたまひて、その後やがてまどろませたまはず。御使ひの行き違ふほども、なほ心もとなくいぶせきに、明かしかねさせたまふ。

夜中過ぐるほどに、「今なん果てさせたまひぬる」とて

いる様子なので、「いかがしようか」と思い惑われる。輦車の宣旨などを下されても、再び局にお戻りになっても、一向に出発をお許しにならない。『『いつと定められているような死出の道にも、後に遺したり先立ったりするまい』と約束したのに、私をうち捨てて、いくらなんでも行ってしまえないだろう」と最後までおっしゃることもできず、息をつまらせて泣かれるお姿を、女もまことにおいたわしいと拝見なさって、

これを限りとお別れする死出の道が悲しいのにつけ、私が行きたいのは命の道のほう、生きとうございました。

まことにこのように思うことができましたら」と息も絶え絶えになりながら、申し上げたいことはある様子だが、じつに苦しげで今にも消え入ってしまいそうなので、「ただこのまま宮中に留めて、どうなってしまうかだけでも見届けよう」とお思いになるが、修法を万全に始めるよう、しかるべき僧侶たちが承っており、更衣が着き次第、今晩からあちらで行われることになっているので、やむを得ないとお思いになりながら退出おさせになったのだった。

【6】帝の御胸はひたと塞がって、退出後もそのままお眠りにならない。更衣の里に遣わしたお使者が行き来するあいだも、ますます病状が気がかりで鬱々とし、夜を明かしかねていらっしゃる。

夜半が過ぎるころ、更衣の里では「今まさにお亡くなりに

泣き騒げば、御使ひもあへなくて帰り参りたるを聞こしめすままに、御心まどひて、何事も思しめされず、いみじくて籠りおはします。宮はかくてもご覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ例はなきことなれば、まかでたまひなんとす。何事かあらんとも思したらず、御乳母どももも泣きまどひ、上も御涙のひまなくておはしますを、あやしと見たてまつりたまふ。

よろしきことだにかかる別れの悲しからぬやうはなきわざなれば、まいて尽きせず、あはれに口惜しげなり。さても言ふかひなければ、例のやうにおさめたてまつる。母北の方、「同じ煙にのぼりなん」と泣きこがれて、御送りの女房の車に慕ひ乗りて、愛宕といふ所にいかめしうその作法したる所におはしつきたる心地、げにいかばかりかありけん。「むなしき御殻を見る見る、なほおはするものとのみおぼゆるがいと悲しければ、灰になりたまはんを見たてまつりて、亡き人とひたふるにも思ひなりなん」とさかしうのたまへれど、車よりも落ちぬべくまどひたまへば、「さは思ひつかし」と人々もてわづらひたてまつる。

内裏より御使ひあり。三位の位贈りたまふ宣命読むを聞くに、悲しきことまたまさりて、限りなく堪へがたし。女御とだに言はせずなりぬるが、あかず口惜しく思されけなった」と泣き騒ぐので、お使者も如何ともしがたく帰参した由をお聞きになるや、御心も惑乱して何事もお考えになれず、ひどく悲しんでお部屋に籠っていらっしゃる。帝は若宮をこのままご覧になっていたいけれども、このような喪中に宮中にいらっしゃる例はないことなので、若君方は退出なさろうとする。若宮は何が起こったともお分かりにならず、御乳母たちも泣きまどい、帝も涙を流してばかりいらっしゃるのを、「どうしたのか」と拝見しておいでになる。

ありふれた場合でさえ、このような別れは悲しくないはずがないのだから、まして悲しみは尽きず、しみじみと残念なさまである。そうは言ってもどうしようもないことなので、常の通りに葬り申し上げる。母北の方は、「娘と同じ煙となって空にのぼってしまいたい」と泣き慕って、野辺送りに従う女房の車に後を追って乗り、愛宕という所でおごそかに火葬の作法をしているところにご到着になった気持ちは、まったくいかばかりであろう。「魂が離れた御亡骸を何度も見ながら、まだ生きていらっしゃるものとばかり思ってしまうのがまことに悲しいので、灰になられるのを拝見して、もうお亡くなりになった人だと一心に思い込むようにいたしましょう」と気丈におっしゃるが、車からも落ちてしまいそうなほど惑乱なさっているので、「そのようなことだと思いましたわ」と

一「燃えはてて灰となりなん時にこそ人を思ひのやまむ期にせめ」（拾遺集・恋五・929・題しらず・詠み人しらず）

れば、いまひときざみをだにとて、かくせさせたまふなりけり。それをも安からず憎みたまふ人々多かりけり。

人々は扱いかね申し上げる。

内裏からお使者がある。お使者が三位の位を追贈する宣命を読み上げるのを聞くと、悲しい思いがひとしおこみあげてきて、この上もなく堪えがたい。女御とさえ呼ばせないままになってしまったのを尽きることなく心残りにお思いになったので、「もう一階級上の位だけでも」とこのようになさるのだった。それをも心中穏やかでなくお憎みになる人々が多かった。

【7】帝や宮中の人々、桐壺更衣を悼む

すこし物の心知りたまへるは、さま、容貌のめでたかりしに添へて、心ばせのなだらかに目やすく、憎みどころなかりしなど、今ぞ思ひ出でたまふめる。さま悪しき御もてなしゆゑこそすぐなくものしたまひしか、げに人柄のあはれに情け情けしかりし御心など、上の女房どもも恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、これがことにやと見えたり。

はかなく日ごろ過ぎて、後の御わざなどもこまかに問はせたまふ。ほどのふるままに、せん方なく恋しく思しめさるれば、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ夜昼涙にひちて明かし暮らしたまへば、見たてまつる人々さへ露けき秋なり。「なきにつけても人の胸あくまじかり

【7】少しものの情趣をお分かりになっている方は、更衣のありさまや顔だちのすばらしかったことに加え、気立てもおっとりとして感じがよく、憎むようなところがなかったことなどを、今になって思い出していらっしゃるようである。見苦しいほど度を超したご待遇ゆえにこそ冷淡におなりになっていたが、本当に人柄は親しみがあって、思いやりが深かった御心などを、帝のお側近く仕える女官たちも恋い偲びあっている。「なくてぞ」（亡くなった後こそ恋しい）とはまさにこのことかと理解されるのであった。

むなしく日数が過ぎて、帝は御法事などにもこまやかに弔問なさる。時間がたつにつれて、どうしようもなく更衣を恋しくお思いになるので、妃たちの夜伽などもまったくお召し

一「ある時はありのすさみに憎かりきなくてぞ人は恋しかりける」（源氏釈）
二「人はいさことぞともなきながめにぞわれは露けき秋も知らるる」（後撰集・秋中・287・男のもとに遣はしける・読人しらず）

ける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには猶許しなくのたまひける。一の宮を見たてまつらせたまふにつけても、若宮の御恋しさ尽きせず思しめし出でらるれば、したしくさぶらふ女房、御乳母たちなどを遣はしつつ、御ありさまを聞こしめす。

【8】靫負命婦、桐壺更衣の母君を弔問

野分してにはかに肌寒き夕暮れに、常よりも思しめし出づること多くて、靫負命婦を遣はす。夕月夜おかしきほどに出だしたてさせたまひて、やがてながめおはします。かやうなる折は御遊びなどせさせたまひしに、心ことなる物の音をかきたて、はかなく聞こへさせ出づる言の葉も、[24]人にはことなりしけはひ、容貌など、面影に添ひてのみ思さるるも、「闇のうつつ」にはなほ劣りけり。

命婦はかしこにまうでて、門引き入るるより、けはひあはれなり。やもめ住みなれど、人ひとりの御かしづきにならず、ただ夜も昼も涙に濡れて、夜を明かし、日中をお過ごしになるので、それを拝見する人々までも露に濡れたように涙がちになる秋である。「死んだら死んだで、人の心を晴れやかにさせないご寵愛だこと」と、弘徽殿などではなおも容赦なくおっしゃったそうだ。帝は一の宮を見申し上げなさるにつけても、若宮への恋しさを尽きることなくお思い起しになるので、気心の知れた女房や御乳母たちなどを更衣の里へ幾度も遣わし、近況をお聞きになる。

【8】野分が起こってにわかに肌寒くなった夕暮れに、常にもまして更衣を恋しく思い出されるので、靫負命婦を更衣の里にお遣わしになる。夕月夜の美しいころに宮中を出発おさせになって、そのまま外を見やっていらっしゃる。このような折は管弦の御遊びなどをおさせになったものだが、更衣はきわだって優れた音色を奏で、何気なく申し上げなさる言葉も、人とは違った雰囲気や顔だちなども、幻影として御身に寄り添っているかのようにただただ思われてしまうものの、それも「闇のうつつ」（現実の更衣）にはやはり劣っているのだった。

一「むばたまの闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」（古今集・恋三・647・題しらず・読人しらず）

二「于時、雲海沈々、洞天日暮。瓊戸、重閟悄然無聲。方士、屏息、斂足、拱手門下。久之而、碧衣、延入。（時に、雲海沈々として洞天日暮れぬ。瓊戸、重ねて閟して、悄然として聲無し。方士、息を屏し、足を斂めて、手を門下に拱く。久しく有りて、碧衣、延き入れつ。）」（長恨歌伝）

とかく目やすきほどなりし住まひを、くれまどひて臥し沈みたまへるほどに、草高くなり、野分にところどころ荒れたる心地して、月影ばかりぞ八重葎にもさはらずさし入りたる。

南面に下ろして母君会ひたまへれど、とみにえものもたまはず。「今までとまりてはべるがいと憂きに、かかる御使ひの、蓬の露分け入りたまへるにつけてなん、いとど恥づかしう」とて、げにえたうまじう泣きたまふ。

『参りてはいとど心苦しう、もの思ふたまへられず』など典侍奏したまひしを、まことに、もの思ふたまへ知らぬ心地にも、げにこそ忍びがたくはべりけれ」と、ややためらひて御消息伝へきこゆ。『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき夜なく、堪へがたきはいかさまにすべきことにかと問ひあはすべき方だになきがわりなきに、忍びて参りたまひてかひなき御物語もなん。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過ぐしたまふらんも心苦しく思しめさるるを、とく参らせたてまつらせたまへ』など、はかばかしくものたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人の心弱くと見たてまつらんことを思ほし、忍ばぬにしもおはしまさぬ御けしきの心苦しさに、承りもはてぬさまにてなんまかではべり

命婦があちらへ伺って、車を門の中に引き入れると、邸の様子はしみじみと悲しみに沈んでいる。母君の一人住まいだが、更衣ひとりをお世話するため何かと見苦しくないようにしていた邸であったのを、悲しみにくれ惑って臥し沈んでいらっしゃるうちに、庭の草は高くなり、野分にあちこちが荒れた様子で、月の光ばかりが八重葎にも遮られずさし込んでいる。

母君は寝殿の南面で命婦を車から降ろして面会なさるが、すぐには言葉もお出しになれない。「今となるまでこの世に留まっておりますのをまことに辛く存じますし、このようなお使者が、涙に濡れて過ごしている陋屋へいらっしゃることにつけても、いっそう恥ずかしく思われまして」と、いかにも堪えがたいようにお泣きになる。『お里へ伺うと一段とおいたわしく、悲しみに何事も考えられません』などと典侍が奏上なさっていましたが、その言葉通り、私のようなものの情趣を存じません心にも、本当に堪えがたく思われることです」と、いくらか気を静めて帝のお言葉をお伝え申し上げる。『しばらくは夢かとのみ途方にくれたが、少しずつ心も落ち着いてくるにつれ、その夢のさめる夜があるはずもなく、堪えがたい思いはどのようにすべきことなのかと相談できる人さえいないのが辛いので、母君にこっそり参内してもらって

一「とふ人もなき宿なれど来る秋は八重葎にもさはらざりけり」（古今六帖・二・宿・1306・貫之）

ぬる」とて、御文たてまつる。

「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなん」とて見たまふ。

ほど経ばすこしまぎるることもやと待ち過ぐる月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになん。いはけなき人もいかにと思ひやりつつ、もろともに育まぬおぼつかなさを、口惜しう。今は昔の形見になずらへてものしたまへ。

など、こまやかに書かせたまへり。

宮城野の露ふきむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

などあれど、えも見はてたまはず。「命長さのいとつらく思ふたまへらるるに、『松の思はんこと』だに恥づかしうはべれば、まいて百敷に行きかふ人の思ひはべらんこともいとつましうて、かかる仰せ言を承りながら、えなん思ひたまへ立つまじき。若宮はいかで思ほし知るにか、参りたまはんことをのみ急ぎ思しためれば、ことわりに悲しく見たてまつりはべる。かやうに内々に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしま

他愛ない話もしたいものだ。若宮のことが気がかりで、涙がちな人々の中でお過ごしであろうことも不憫に思われるので、はやく参内させられよ』など、はっきりとも最後までおっしゃらず、むせび泣かれながら、一方では周囲が『お気弱な』と見申し上げることをお気になさり、ご悲嘆をお隠しにならないわけでもないご様子のおいたわしさに、すべてを承れないままで宮中を出てまいりました」と、帝のお手紙をお渡しする。

「悲しみに目も見えませんが、このように畏れ多い仰せ言を光といたしまして」とご覧になる。

時がたてば悲しみが少しまぎれることもあろうかと待ちながら過ぎる月日が重なるにつれて、まこと忍びがたさが募るのは如何ともしがたいことです。幼い若宮もどうしているかと常に気にかかり、共に養育しないもどかしさを口惜しく思いまして。今は昔を思い出すよすがと見なして参内なさってください。

などとこまやかにお書きになっている。

宮城野（宮中）の私に涙を催させる風の音を聞くにつけ、小萩（若宮）がどのような様子かと案じています。

一「多男子即多懼、富即多事、寿即多辱。（男子多ければ即ち懼多く、富めば即ち事多く、寿なれば即ち辱多し。）（荘子・外篇・天地）。京都大学蔵本『紫明抄』はこれを引き、「寿即多辱」との訓を示す。

二「いかでなほありと知らせじ高砂の松のおもはんことも恥づかし」（古今六帖・五・名を惜しむ・3057）

すも忌々しく、かたじけなくなん」とのたまふ。

若宮は大殿籠りにけり。「見たてまつりて、御ありさまも詳しう奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらんに、夜更けはべりぬらん」と急ぐ。「くれまどふ心の闇もすこし晴るくばかりなん聞こえさせまほしうはべるを、御わたくしにも、のどかにまかでたまへ。年ごろは、面だたしう嬉しきついでにのみ立ち寄りたまひつるを、かかる御使ひにて見たてまつるは、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれたまひしより思ふ心ありし人にて、故大納言も今際となるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたまへ。われ亡くなりぬとて、口惜しき方に思ひくづほるな』と返す返す諫めおきたまひしか。はかばかしう思ひ後むべき人なき交じらひは、なかなかなべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言違へじとばかりに出だしたてはべりしを、身に余るまで御心ばへのかたじけなきばかりに面隠しつつ交じらひはべりつるに、ついに横様なるやうにてかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなん、かしこき御心ばへを思ひきこえさせはべる」と言ひもやらず泣きたまふほどに、いたく更けゆけば、「上もしかなん。

一「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（後撰集・雑一・1102・太政大臣の、左大将にて相撲の還饗しはべりける日、中将にてまかりて、こと終はりてこれかれまかりあかれけるに、やむごとなき人、二三人ばかり留めて、客人、主、酒あまた度の後、酔ひにのりて子供の上など申しけるついでに・兼輔朝臣）

などとあるが、とても最後までお読みになれない。「長生きが本当に辛く思われますし、『松の思はんこと』（長寿の松が私に思うであろうこと）さえ恥ずかしいですのに、まして宮中に行き交う人々がどう思いますかも憚られ、このような仰せ言を頂戴しながら、到底思い立てそうにもありません。若宮はどのようにご存じになるのでしょう、参内なさることのみをお急ぎでいらっしゃるようなので、それも無理のないことと悲しく拝見しております。このように内心思っておりますことを帝に奏上なさってください。子に先立たれた不吉な身でございますから、こうして私の側に若宮がおいでになるのも縁起が悪く、畏れ多いことで」とおっしゃる。

若宮はお休みになってしまっていた。「お目にかかって、ご様子を詳しく奏上したかったのですが、主上もお待ちあそばしているでしょうし、夜も更けておりましょうから」と帰参を急ぐ。「惑乱する心の闇をほんの少し晴らす程度にお話したく存じますし、私的にも気安くお訪ねください。ここ数年は、晴れがましく嬉しい折にばかりお立ち寄りくださったのに、このような弔問のお使者として拝見するとは、返す返すも思うにまかせない命でございますこと。娘はお生まれに

『わが御心ながらあやしく、人の驚くばかり[30]思されしも、かく長かるまじかりける契りなりけりと、今はつらかりける人となん思ひなす。世[31]にいささかも人の心を曲げたることはあらじと思ひしを、ただこの人のゆゑにてあまたのさるまじき人々の恨みを負ひて、はてにはかくうち捨てられて、心を収めん方なきさまになりゆくも、いかなりける契りにかと、前の世よりゆかしくなん』、うち返しつつ、しほたれがちにてのみなんおはします」など尽きせず語るに、「夜もいたく更けぬれば、今宵過ぐさず御返り奏せん」とて急ぎ参る。

月は入り方近くなりて、空清くのどかなるに、風すこしうち吹きて、草むらの虫惜しみ顔に声々ふりたてたるなど、すべていとたちはなれがたき草のもとなり。

鈴虫の声のかぎりをつくしてもながき夜あかずふる涙かな

えも言ひやらず。

「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人

かごとも聞こえつべく」など言はせたまふ。をかしきさまなる贈り物などあるべき折にもあらねば、ただかの御形見

なったときから私たちが期待を寄せていた人で、故大納言も臨終の間際まで、『ただ一心に、この人を入内させるという本懐を、必ず遂げられよ。私が亡くなったからといって、不本意に諦めてはならぬ』と繰り返しお諫めになったのでした。しっかりと後見してくれる人のいない宮仕えはかえって難しかろうと存じましたものの、『ただその遺言を違えまい』との一心で出仕させましたところ、身に余るほどのお情が畏れ多くもありがたいことだけにおすがりして、不如意なことも取り繕ってお仕えしておりましたが、ついに普通でないさまでこのように亡くなってしまいましたので、かえって恨めしいことと、畏れ多いお情をお思い申し上げております」と言い終えずお泣きになるうちに、夜もたいそう深くなっていくので、「主上におかれても同じこと。『自分の心でありながら不思議と、人が驚くほどに恋しく思われたのも、このように長続きするはずもない宿縁によるものであったと、今は恨めしい人だと思うようにする。私は、決してわずかばかりも人の心を損ねたことはないと思っていたが、ただこの人のために、多くの恨ませてはいけない人々の恨みを負い、最後にはこのように先立たれて、心を静めるすべもないようになっていくのも、どのような宿縁だったのか、前世からのことも知

一「五月雨にぬれにし袖にいとどしく露おきそふる秋のわびしさ」（後撰集・秋中・277・母の服にて里にはべりけるに、先帝の御文たまへりける御返事に・近江更衣）

の装束一くだり、かやうの用もやとて残したまへりける御櫛上げの調度だつ物添へたまふ。

若き人々などの悲しきことをばさらにも言はず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさまなどを思ひきこゆれば、とく参りたまはなんことをそそのかしきこゆれど、かく忌々しき身の添ひきこえんもいと人聞き憂かるべし、また、見たてまつらでしばしもあらんはいと後ろめたくおぼえたまへば、すがすがともえ参らせたまはぬなりけり。

りたいものだ』と繰り返され、ただ涙がちにのみお過ごしでいらっしゃいます」など尽きることなく語って、「夜もたいそう更けたので、今夜のうちにお返事を奏上しましょう」と急いで宮中に帰参する。

月は入り方近くなり、空は澄み、穏やかで、風がやや吹いて、草むらの虫は名残惜しい様子でその音色をふりしぼっているのなども、すべてがじつに立ち去りがたい草のもとである。

鈴虫のように声のかぎりをつくして泣いても、長い夜でも足りないほどに尽きることなく流れる涙でありますよ。言いおおすことができない。

「虫の鳴き声の頻りな浅茅生に、私もそのように泣き暮らしておりますが、さらに露（涙）を添える、雲上からいらっしゃったあなた様です。

恨み言も申し上げてしまいたく」などと女房にお伝えさせなさる。目を引くような贈り物などをするべきときでもないので、ただ御形見の装束一揃いに、このような用途もあるかと残しておかれた御櫛上げの調度のようなものをお添えになる。

若い女房などは、悲嘆に暮れていることは改めて言うまで

一「言訖憫黙、指碧衣女、取金釵、鈿合、各、折其半、授使者、曰、為我、謝太上皇、謹献是物。尋舊好也。（言ひ訖って、憫黙として、碧衣の女を指して、金釵、鈿合を取りて、各、其の半を折って、使者に授けて、曰く、我が為に、太上皇に謝せまく、謹んで是の物を献まつれ。舊き好を尋よとなり。）」（長恨歌伝）

【9】命婦参内、宮中に帰参

命婦は参りて、まだ大殿籠らず待ちおはしましけるを、いとあはれに見たてまつる。御前の壺前栽いとおもしろきさかりなるをご覧ずるやうにて、しのびやかに、心にくきかぎりの女房五六人ばかりさぶらはせたまひて、御物語などせさせたまふなりけり。(32)このごろ明け暮れご覧ずる長恨歌の御絵、亭子の院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる大和言の葉にも唐土の詩をも、ただその筋をぞ真木柱にせさせたまふ。

いとこまかにありさま問はせたまへば、あはれなりつることどもをしのびやかに奏す。御返りご覧ずれば、

いとも畏きは置き所もはべらず。かかる仰せ言を承るにも、かきくらす乱り心地になん。

もないが、宮中を朝夕に見なれていたので大変心寂しく、帝のお姿などを慕い申し上げているので、早く参内なさるよう急き立て申し上げるが、母君は、このような不吉な身が若宮に付き添い申し上げるのもまったく外聞が悪いに違いない、そうかといって、わずかなあいだでも若宮を拝見せずにいるのもとても気がかりにお思いになるので、思い切って参内させることがおできにならないのであった。

【9】命婦は参内して、まだ御寝にならずお待ちでいらっしゃるのを、まことにおいたわしいことと拝見する。御前の壺前栽がたいそう趣深いさかりなのをご覧になっているふうにして、ひっそりと、奥ゆかしい女房ばかりを五六人ほど伺候おさせになって、語らっていらっしゃるのだった。近ごろ朝夕にご覧になっている長恨歌の御絵――亭子の院がお描かせになり、伊勢、貫之にお詠ませになった和歌をも漢詩をも、ただそのような趣向のものを心の拠り所となさっている。

たいそう詳しく里の様子をお尋ねになるので、命婦はしみじみと悲しかったことなどをひそやかに奏上する。

母君からのお返事をご覧になると、

大変畏れ多いお言葉を賜り、どうすればよいか分かりかねております。このような仰せ言を承るにつけましても、

一参考歌「真木柱つくる杣人いさくめの仮庵のためと思ひけんやは」（古今六帖・二・杣・1017）。岩坪健（2013）は『源氏釈』が他の巻の注記で使用する「わぎもこが来てはよりたつ真木柱そもむつましきゆかりと思へば」などを踏まえて「ゆかり」と解釈する。

あらき風ふせぎし影のかれしより小萩がもとぞ静心なき

などやうに乱りがはしきを、心の(35)収まらぬほどとご覧じ許す。いとかくしも人(36)には見えじと思ししづめたれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。

ご覧じはじめし年月のことさへ、かき集め思ほしつづけられて、時の間だにおぼつかなかりしを、かくても月日は経けりと、あさましう思しめさる。「故大納言の遺言違へず、宮仕への本意深くてものしたりし喜びは、かひあるさまにとこそ思ほしわたりつれ、言ふかひなしや」とのたまはせて、いとあはれと思しやれり。「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたらばさるべきついでもありなん。命長くとこそ思ひ念ぜめ」などのたまはす。

心も真っ暗に思い乱れておりまして。

世間の荒い風をふせいでいた木（娘）が枯れて木影（庇護）がなくなってからというもの、木のもとにある小萩（若宮）のことが案ぜられてなりません。

などのようにとり乱したさまであるのを、まだ気持ちがおさまらない頃なのだとお見逃しになる。帝は、「ここまで惑乱している姿を人には見られまい」と心を落ち着かせようとなさるが、とてもこらえきることがおできにならない。

入内した当初のことまでもあれこれと思い起こされて、「わずかな間でさえ会わないのがもどかしかったのに、更衣がいなくても月日は過ぎるものであった」と思いがけないことと お思いになる。「故大納言の遺言を違えず、宮仕えの志を遂げてくれた感謝のしるしに、『その甲斐があったと喜んでくれるように』と思いつづけていたが、今となっては詮のないことよ」とおっしゃって、母君をたいそう痛ましくお思いになる。「そうであっても、若宮が成長すれば自然としかるべき機会もあろう。『そのために長生きしよう』と思って耐えてほしい」などとおっしゃる。

【10】帝、長恨歌によそえて桐壺更衣を哀惜

この贈り物をご覧ぜさするにも、亡き人の在り処たづね出でたりけんしるしの釵ならましかばと思さるるも、いとかひなし。

たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

絵に描きたる楊貴妃はいみじき絵師といへども、筆かぎりありければ、いと匂ひ少なし。尾花の風になびきたるよりもなよび、撫子の露に濡れたるよりもなつかしかりし容貌、けはひを思ほし出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、「羽を並べ、枝を交はさん」と契らせたまひしに、誰もかなはざりける命のほどぞ尽きせず恨めしき。

風の音、虫の音につけても、もののみ悲しく思しめさるるに、弘徽殿、世の中ものむつかしく思されて上の御局

【10】命婦がこの贈り物をお目にかけるにつけても、「亡き人の居場所を探し出したという証の釵であったならば」とお思いになるのも、まったく甲斐のないことである。

亡き人の魂を探しに行く幻術士がいればよいのに。人伝てにでも、あの人の魂のありかをそこと知ることができるように。

絵に描いてある楊貴妃は、優れた絵師であっても筆で描くことには限りがあったため、じつに精彩を欠いている。尾花が風になびいているさまよりもなよびやかで、撫子が露に濡れているさまよりも慕わしかった更衣の顔だちや様子を思い出されると、花の色や鳥の音をもってしても喩えようがない。朝夕の口癖に、「比翼の鳥のように羽を並べ、連理の枝のように枝を交わそう」とお約束なさったのに、誰にとっても思うにまかせないものであった天命こそが、尽きることなく恨めしい。

一「言訖憫黙、指碧衣女、取金釵、鈿合、各、折其半、授使者、曰、為我、謝太上皇、謹献是物。尋舊好也。（言ひ訖って、憫黙として、碧衣の女を指して、金釵、鈿合を取りて、各、其の半を折って、使者に授けて、曰く、我が為に、太上皇に謝せまく、謹んで是の物を献まつれ。舊き好を尋よとなり）」（長恨歌伝）

二「在天願作比翼鳥　在地願為連理枝（天に在りては願はくは比翼の鳥作らむ　地に在りては願はくは連理の枝為らむ）」（長恨歌）

三「此恨綿綿無絶期（此の恨みは綿綿として絶ゆる期無けむ）」（長恨歌）。なお、那波本では「無尽期」とする。

四「梨園第子、玉琯、音發聞霓裳羽衣一聲、則天顔、不怡。左右、歔欷。（梨園の弟子、玉琯、音を發す。霓裳羽衣の一聲を聞きては、則ち天顔怡しびたまはず。左右、歔欷す。）」（長恨歌伝）

にも参上りたまはず、月のおもしろきに遊びをぞしたまふ。このごろの御けしきを見たてまつる上人、女房など、かたはらいたしと聞きけり。いと押したち、かとかどしくものしたまふ御方にて、ことにもあらず思し消ちてもてなしたまふなるべし。

月も入りぬ。

雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生の宿

思ほしやりつつ、灯火をかかげ尽くしておはしますに、右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目を思しめして、夜の御殿に入らせたまひぬれど、まどろませたまふことといとかたし。

朝に起きさせたまひても、「明くるも知らで」と思ほし出づるに、なほ朝政は怠りぬべかめり。ものなども聞こしめさず、朝餉のけしきばかり触れさせたまひて、大床子の御膳などはいとはるけくのみ思ほしめしたれば、陪膳にさぶらふ人々など、いと心苦しう見たてまつり悩む。

風の音、虫の音につけても、無性に悲しくお思いになられているが、弘徽殿女御は帝とのご関係を煩わしく思われて上の御局にも参上なさらず、月が美しいのによせて管弦の遊びをなさっているようである。帝はひどくご気分を害してお聞きになる。近ごろの帝のご様子を拝見している殿上人や女房などは、苦々しく聞いているのであった。弘徽殿女御は大変我が強く、険がおありのお方なので、帝のお嘆きを些末なことと無視してふるまっていらっしゃるらしい。

月も沈んだ。

雲の上（宮中）でも、涙にくれて見えない秋の月だ。ましてどうして澄んで見えようか、どんなに嘆いて住んでいるだろうか、あの浅茅生の宿（更衣の里）では。

思いを馳せながら、灯芯をかきたてて尽きるまで起きておられると、右近衛府の宿直奏の声が聞こえてくるのは、丑の刻になってしまったに違いない。人目を憚ってご寝所にお入りになったものの、うとうととなさることはじつに難しい。

朝お起きになっても、「明くるも知らで」（更衣と夜が明け

一「秋燈挑尽未能眠（秋の燈挑げ尽して未だ眠ること能はず）」（長恨歌）

二「玉すだれ明くるも知らで寝しものを夢にも見じとゆめ思ひきや」（伊勢集・55・長恨歌の屏風を亭子院の帝描かせたまひて、その所々詠ませたまひける　帝の御になして）。先に出た宇多天皇の長恨歌絵のため、「春の宵苦短くして日高けて起く」（長恨歌）をもとに詠まれた歌。

三「春宵苦短日高起　従此君王不早朝（春の宵苦短くして日高けて起く　此より君王早朝したまはず）」（長恨歌）

すべて近くさぶらふかぎりは、男女、「いみじきわざかな」と言ひ合はせつつ嘆く。「さるべきにこそおはしますらめ。多くの人の謗り恨みを憚らせたまはず、この御方に片寄りたることは道理を失はせたまひしに、今はかく世の政をも思しめし棄てたるやうになりゆくは、いと絶えぬべしきわざかな」、他の朝廷の例かき集め、ささめき嘆きけり。

【11】一の宮、立坊する　桐壺更衣の母君の死

月日経て若宮参りたまへり。いとこの世のものにもあらず、きよらに生い成りたまへれば、ゆゆしと思しめしたり。

あくる年の春、春宮定まりたまふにも、いと引き越さまほしう思しめせど、御後見すべき人もなく、世の中にも受けひくまじきことなれば、なかなか危ふく思しめしなりぬるを、「さばかり思しめしながら、限りこそありけれ」と、女御も御心落ちゐたまふ。世人も聞こゆ。

かの祖母北の方、慰む世なく思し沈みて、おはしにけるのも知らず共に寝過ごしたものを）と思い出されては、やはり今も朝のご政務をおろそかになさってしまうようである。お食事も召し上がらず、朝餉にはほんのしるし程度にお手をつけるだけで、大床子の御膳などはほど遠い存在のようにばかり思し召されるので、陪膳に伺候する人々などは、まことに心苦しく拝見して心を痛めている。帝のお側近くお仕えする人々は皆、男も女も、「ひどいご状態よ」と言い交わして嘆いている。「きっとそのようなご命運でいらっしゃるのだろう。多くの人の非難や恨みを憚られず、このお方ばかりに心を寄せて道理を失われてしまったのに、今は今でこのようにご政務をもうち棄てあそばすようになっていくのは、本当に今にも政治が途絶えてしまいそうな状態であるよ」と、他国の朝廷の例をあれこれ取り集め、陰で嘆いているのであった。

【11】月日が経って、若宮が参内なさった。まったくこの世のものではないかように美しくご成長なさったので、帝はそら恐ろしいと思し召される。

翌年の春、一の宮が春宮にお決まりになる際にも、順番を飛び越して若宮を立坊させたくお念じになるが、後見をつとめるべき人もなく、世間でも承服するはずのないことなので、かえって危ういとのお考えに至られたのを、「あれほどお可愛がりになりながらも、やはり決まりというものがあったのだ」と、弘徽殿女御も御心を落ち着かせられる。世間も同様

ん方にゆかんと願ひたまふしるしにや、つひに失せたまひぬれば、またこれを思し嘆きけることかぎりなし。宮は六つになりたまふ年なれば、このたびは思し知りて、いみじう恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れきこえたまへるを、見たてまつり置く悲しさをぞ、のたまひける。

【12】若宮、妃たちに親しむ

今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、御書始などせさせたまひて、世に知らず聡く賢くおはすれば、あまり恐ろしきまでご覧ず。

今は誰も誰もなにかは憎みきこえたまはん。母君おはせねば、かく類なき御さま、容貌をみなあはれがり、らうたきものにて聞こえたまふ。

弘徽殿などにも渡らせたまふ御供にて、やがて御簾の中にも入れたてまつらせたまふ。いみじき武士を敵にて持たまへりとも、まづ見ては心やはらぎぬべきさましたまへれば、えさし放ちきこえたまはず。女宮たちも二ところさ

にお噂申し上げる。

あの若宮の祖母でいらっしゃる北の方は、心を慰める機会もなく沈みこまれて、「亡き更衣がいらっしゃるところへ行こう」と願われたためだろうか、とうとう亡くなってしまわれたので、帝はまたこのことを限りなくご悲嘆なさった。宮は六歳におなりになる年なので、今回のご逝去は理解なさり、たいそう慕ってお泣きになる。北の方は死に際し、何年もお親しみ申し上げなさった若宮をお残しする悲しさを、口になさったのだった。

【12】若宮は、今は内裏にのみいらっしゃる。七歳におなりになるので、御書始などをおさせになると、世にまたとなく聡明で賢くいらっしゃるので、度を超して恐ろしいほどとご覧になる。

今となっては、どなたにおかれても、どうしてお憎み申されようか。母君がいらっしゃらないので、このように類なく美しいお姿や顔だちに皆心打たれ、愛おしい方とお思い申しあげられる。

帝が弘徽殿などへお渡りになる際のお供として、そのままお簾の中にもお入れ申し上げなさる。恐ろしい武士を敵としていようとも、何はさておき、若宮を見ると心がなごんでし

一「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をもやはらげ、たけき武士の心をも慰むるは歌なり」（古今集・仮名序）

し並びおはしますに、なずらひたまふべき方なきぞ、いと口惜しかりける。

いづれの御方々もえ隠れあへたまはず、みな見えたてまつりたまふに、今よりいみじうなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをかしう打ちとけぬ遊びがたきにぞ、みな思ひきこえたまへる。わざとの御学問をばさるものにて、はかなき琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひつづけばいとことごとしく、ただ者にもあらず聞こえぬべき御ありさまになんおはしける。

【13】高麗の相人の観相

そのころ、高麗人の参りたりける中に、かしこき相人のありけるを聞こしめして、宮の内に召さんは宇多の帝の[50]御諫めありければ、いみじう忍びやつして、この皇子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子[51]のやうに思はせて、率てたてまつる。

相人驚きて、あまたたび傾きあやしがる。「国の親となりて、いとその上なき位にのぼるべき相おはします人の、その方につけては乱れ憂れふることやあらん。おほやけの固めとなりて天下をたすくる方にて見れば、その相違ふ」

まうにちがいない様子をしていらっしゃるので、突き放し申すことがおできにならない。弘徽殿女御には姫宮たちもお二方いらっしゃるが、この若宮に肩を並べられそうな美質のないのことを、まことに残念にお思いであった。

どちらの方々も隠れとおすことがおできにならないで、若君をはっきりと拝見なさると、もう今の時分からすばらしく気品があり、こちらが気恥ずかしいほど優れていらっしゃるので、まことに立派で気の張る遊び敵だと、どなたもお思い申し上げていらっしゃる。正式なご学問はもちろんのこと、ちょっとした琴笛の音でも雲居を響かせ、そのご才能をすべて並べていけばじつに仰々しくなってしまうほど、普通の方ではないように申し上げなければならないご様子でいらっしゃった。

【13】そのころ、高麗人が来朝していた中に、才知ある相人がいたのを帝はお聞き及びになり、宮中へお召しになるのは宇多の帝のご訓戒があったので、たいそうこっそりと目立たないようにして、この皇子を鴻臚館にお遣わしになる。ご後見のようにお仕えしている右大弁の子ということにして、お連れ申し上げる。

相人は驚いて、幾度となく首を傾げていぶかしがる。「国の親となって、まこと至上の位にのぼるべき相でいらっしゃる人ですが、そういった方として見ると、国が乱れて憂慮することがありましょうか。朝廷の要となって国政を補佐する

と申す。

弁も才かしこき博士[52]にて、言ひかはしたることどもなん興ありける。文など作りかはして、今日明日帰りなんとするに、かくめづらしくありがたき人に会ひたてまつりたる喜び、かへりては悲しかるべきことの心ばへをおもしろく作りたるに、皇子もあはれなる句を作りたまへるを、かぎりなく愛でたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物ども賜はせけるを、漏らさせたまはねど、おのづから言広ごりて、春宮の祖父大臣など聞きたまひて、いかなることにかと思し疑ひてなんありける。

【14】帝、若宮の臣籍降下を決定

帝、かしこき御心に大和相に思し仰せたることありければ、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりと思しめし合はせて、無品の親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ、わが御代もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見するなん、[53]行く末も頼もしげなると思し定めて、いよいよ御学問をせさせたてまつりたまふ。道々の才をならはさせたまふに、際[54]ことにて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王におはせば世の疑ひ負ひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき[55]道にも勘へさせたまふに、ただ同じさまにのみ勘へ申せ方として見ると、その相も違っています」と申し上げる。

右大弁も漢才ゆたかな博士なので、相人と言い交わしたことには興趣があった。詩などを作り交わして、相人は今日明日にも帰国しようとするときにこのように世にも稀なすばらしい人にお会いできた喜びと、そのためにかえって帰国が悲しくなるにちがいないという趣旨を見事な詩にすると、皇子も琴線に触れる句をお作りになるのを、この上なくお褒め申して、すばらしい贈り物を献上する。朝廷からも相人へ多くの品々をお与えになったのを、帝は言外なさらないが、自然と噂は広がり、春宮の祖父である右大臣などがお聞きになって、「どのようなことなのか」と疑念を抱いていらっしゃるのだった。

【14】帝は畏れ多い御心によって、大和相に仰せつけていらっしゃることがあったので、今までこの若宮を親王にもおさせにならなかったのを、「相人はまことに聡明である」とお考えあわせになられ、「無品の親王で外戚の後ろ盾がないといった不安定な世渡りはさせまい。私の治世もいつまで続くか分からないのだから、臣下として朝廷のご後見をすることこそ将来も安泰というものだ」とご決心なさって、ますますご学問をおさせ申し上げなさる。さまざまな学問をお学ばせになると、それらのご才能は一際抜きんでていて、臣下にはじつに惜しいのだが、親王でいらっしゃると世間からの疑いを負うに違いない様子でいらっしゃるので、宿曜という優

ば、源氏になしたてまつらせたまふべく思しおきてたり。

【15】前帝の四の宮、入内して藤壺女御となる

年月にそへて、御息所の御事思し忘るるときなし。慰むやとさるべき人々を参らせてご覧ずるにも、なずらひにだに思しめさるべきもなく、ありがたき世なりければ、もの憂くのみ思しむすぼほれたり。

前帝の四の宮の、御容貌すぐれたる名高く[57]おはしますを、母后、一なくかしづきたてまつりたまひけり。上にさぶらふ典侍、前帝の御時の人にて、かの宮にも親しく参りければ、小さくおはしましける御時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「失せたまひにし御息所の御容貌になずらはせたまへる人を、三代の宮仕へつかうまつりつるに、え見たてまつりはべらぬを、后の宮の姫宮こそいとよくおぼえて生ひ出でさせたまへれ。類ありがたき御容貌なり」と奏しけるを聞こしめして、まことにやと御心とまらせたまへば、参らせたてまつらせたまふべき由ねんごろに聞こえたまひけるを、母后、「あな恐しや。春宮の女御の御心いとさがなくて、桐壺の御息所もいとはかなくもてなされにけり。例もゆゆし」と思しつつみて、すがすがとも思したざりけるほどに、后失せたまひぬ。「心細くおはしますらむを、ただ女御子たちの同じ列に思ひきこえん」とせちに聞こえたまへば、さぶらふ人々、御

【15】年月が経つにつれてますます、帝は御息所のことをお忘れになるときがない。「心が慰められようか」としかるべき人々を入内させてご覧になるが、更衣と比較することすらできそうな方もなく、あのような人はめったにおられない世であるので、ただ鬱々と沈みこんでいらっしゃる。

前帝の四の宮で、美貌の評判が高くていらっしゃる方を、母后がまたとなく大切にお育て申し上げていらっしゃった。帝にお仕えしている典侍が、前帝の御代の人で、その宮にも親しく参上していたので、幼くていらっしゃったころから拝見し、今もほのかにお見かけして、「お隠れになった御息所のお顔ばせに肩をお並べになる人を、三代の帝にお仕えしましたものの拝することがかないませんでしたが、后の宮の姫宮こそ、まことに御息所を髣髴とさせるようご成長あそばしました。まったく稀なるご美貌です」と奏上したのをお聞きになって、「まことだろうか」と御心をとめられたので、入内させ申し上げなさるよう熱心にお申し入れになったのを、母后は「まあ、恐ろしい。春宮の母君の女御は性格にたいそう難があって、桐壺の御息所もまったく取るに足らないように扱われたとか。その例も不吉なことです」と躊躇われて、はっきりとご決意なさらないうちに、その母后はお亡くなりになってしまった。「心細くいらっしゃるだろうから、ただ

後見たち、御兄人の兵部卿宮など、「げに、かくつれづれとおはしまさむよりは、内裏住みもしたまひて御心もやれかし」など定めたまひて、参らせたてまつらせたまひてけり。

御局は藤壺なり。御容貌、ありさまは、聞こしめしに違はずめでたきにそへても、げにあやしきまでぞおぼえたまひける。これは人の御ほどもまさり、思ひやりめでたくて、誰もえ貶めきこえたまはねば、うけばりてあかぬ事となし。かれは人の許し申さざりしに、御心ざしはあやにくなりしぞかし。思し移るとはなけれど、おのづからまぎれて、昔の恋しさこよなく慰ませたまふも、あはれなるわざなりけり。

私の皇女たちと同様にお思い申し上げるつもりです」と熱心に申し上げなさるので、姫宮にお仕えしている女房、ご後見の人々、御兄弟の兵部卿宮などが「まことに、このように寂しくお過ごしになるよりは、内裏にお住まいになって気をお晴らしなさいませ」などとお決めになって、入内させ申し上げられた。

御局は藤壺である。お顔だちや姿は、帝がお聞きになっていたことと違わずすばらしいのに加え、本当に不思議なまでに更衣の面影に似通うとお感じになるのだった。このたびの方は身分も高く、思慮深くて、どなたも見下し申すことがおできにならないので、気兼ねなく振る舞われてご不満なことがない。あの桐壺更衣は世間がお許し申さなかったのに、ご寵愛は不都合なほど深かったことよ。お気持ちが移るというわけではないが、自然と気が紛れ、亡き更衣への恋しさが特別お慰みになるのも、感慨深いことなのだった。

【16】源氏、藤壺女御を慕う

【16】源氏の君は帝のお側をお離れにならないので、帝がたびたびお渡りになるお方におかれては、まして隠れきることがおできにならない。どちらの妃たちも、「私は人に劣っているだろう」と思う人がいるだろうか、各々まことに美しくていらっしゃるが、皆お年を重ねていらっしゃる中にあって、藤壺女御はじつに若くて可愛らしく、ことさらお隠れになるけれども、源氏の君は朝夕に帝のお側にいらっしゃるので、自然とちらりと拝見なさると、母君の御息所のことは面

源氏の君は御あたり避けさせたまはねば、しげく渡らせたまふ御方には、ましてえ隠れあへたまはず。いづれの御方も、われ人に劣らむと思したる人やはある、とりどりにいとめでたくおはすれど、みな大人びつつものしたまふ御中に、いと若う美しげにて、せちに隠れたまへど、朝夕にさぶらひたまへば、おのづから漏り見たてまつらせたまふに、母御息所は影だにおぼえたまはぬに、「これなん、

いとよう似たてまつらせたまへる」と典侍の聞こえければ、若き御心にいとあはれと思ひきこえて、常に見たてまつらまほしう、なづさひまゐらせばやとぞおぼえたまふに、上もかぎりなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべくなんある。なめしと思さで、らうたくしたまへ。面つき、まみなどのいとよく似たりし人ゆゑ、通ひきこえためるも似げなからず」など常に聞こえたまふを、幼心地にうれしう思ひて、はかなき花紅葉につけつつも、をかしきさまなるをば心ざしなどこよなく心寄せきこえたまへば、弘徽殿またこの宮とも御仲らひうるはしからず、そばそばしきゆかりに、もとよりの憎さうちそひて、いとものしと思したり。

世に類なくをかしと見たてまつらせたまひ、名高くおはする女御の御容貌も、なほこの君の匂はしさはまさりて、美しげなることたとえん方なきを、世の人、「光る君」と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなりとて、「かかやく日の宮」とぞ聞こゆめりし。

影すら覚えていらっしゃらないものの、「こちらのお方が、たいそう御母君に似申し上げていらっしゃいます」と典侍が申し上げるので、幼心になんとも慕わしいと思い申し上げ、常に拝見していたく、「慣れ親しませていただきたい」とお思いになっていると、帝におかれても、この上なく大切なお二人なので、「源氏の君をお疎みになられますな。この君は、不思議なほど、あなたに母を重ねて拝見してしまうばかりなのです。失礼なとお思いにならず、お可愛いがりください。亡き更衣は面ざしや目もとなどがあなたにとてもよく似ていた人なので、あなたを母に似通うよう拝見するらしいのも無理もないことです」など常に申し上げなさるのを、幼心に嬉しく思って、ささやかな花や紅葉につけても、風情あるものを好意のしるしに差し上げるなど、格別に御心を寄せ申されるので、弘徽殿女御はまたこの藤壺女御ともご関係がよくなく、源氏の君を気に入らない女御に連なる者として、桐壺更衣のご生前からの憎さも加わって、じつに不愉快だと思っていらっしゃる。

源氏の君がまこと類なくすばらしいと拝見なさり、名高くていらっしゃる藤壺女御のご美貌にも、さらにこの君の照り映えるような美しさはまさっていて、愛らしいことは喩えようもないので、世間の人々は「光る君」とお呼びする。藤壺女御もこれに肩をお並べになって、ご帝寵もそれぞれにめでたいとして、「輝く日の宮」と申し上げるようであった。

【17】源氏、元服する

この君の御童姿いと変へまうく思せど、十二になりたまふ年、御元服のことあり。帝よろづに居たち思し営みて、かぎりあることにことをそへ、いみじきけうらを尽くさせたまふ。一年、春宮の御元服、南殿にてありし儀式のよそほしさに劣らせたまふことなし。ところどころの饗、内蔵寮、穀倉院などやうのおほやけごとに例の疎かに仕ふまつることどもも、とりわきたる仰せ言ありて、みなおのおのきよらを尽くしたり。

おはします殿の東の廂に東向きに御倚子たてて、引入の大臣の御座、御前にあり。時なりて、源氏参りたまふ。鬢結ひたまへる面つき、顔の匂ひ、さま変へたまはんこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人仕ふまつる。いときよらなる御髪を削ぐほど、心苦しげなり。上は、御息所の見ましかばと思し出づるに堪へがたきを、心強く思しかへす。

冠したまひて、御休み所にまかでたまひて、御衣たてまつり変へて、下りて拝したてまつりたまふさまを、みな人涙落としたまふ。帝はましてえ忍ばせたまはず、思し忘るる折もありつる昔のことも、とりかへしいと悲しく思さる。いとかくきびはなるほどは上げ劣りもや、と疑はしく思しつるを、まためづらかにあさましき美しさそひたまへり。

引入の左大臣、皇女腹にただ一人いつきたまふ御娘、

【17】帝はこの君の童形のお姿を少しも変えたくないとお思いになるが、十二歳におなりの年、ご元服が行われる。帝はあらゆることを熱心に采配なさって、定められた儀式をさらに豪華にし、大変に華美を極められる。前年、春宮のご元服が南殿で行われたときの儀式の壮麗さに引けをお取らせになる点がない。各所で行われる饗で、内蔵寮や穀倉院などのようなところが公的行事の決まり通りにいつもはなおざりにご調進するものなども、今回は特段のご指示があって、皆各自が善美を尽くしている。

帝がおいでになる清涼殿の東廂に東向きに御倚子を置き、引入の大臣の御座は帝の御前にある。定刻になって、源氏が参上なさる。角髪をお結いになっている面ざしや顔の輝くような美しさは、大人の姿になられるのが惜しいさまである。大蔵卿が理髪をご担当する。まことに美しい御髪を削ぐのは心苦しい様子である。帝は、「御息所が見たならば」とお思い起こしになると堪えがたいものの、気を強くお持ちになる。

君は加冠の儀を終えられて、ご休憩所に退出なさり、大人のご装束にお召し替えして、東庭へ降りて拝舞なさる姿に、皆涙を落される。まして帝は涙をこらえることがおできにならず、お忘れになる折もあった昔のことも、今改めてひどく悲しくお思いになる。「このようにほんの幼い年頃では大人の姿で見劣りすることもあろうか」と疑わしく思われていたが、また世にも稀な、驚くばかりの美しさがお加わりになっ

春宮より御けしきあるを、思しわづらふことありける、この君にたてまつらんの心深きなりけり。上に御けしき賜らせたまひければ、御けしきよくて、「さらばやがて、この折の後見なかめるを、添臥にも」ともよほさせたまひければ、さ思ほしたり。殿上にまかでたまひて、人々大御酒などまゐるほど、親王たちの御座の末に源氏の君つきたまへり。大臣、けしきばみたまふことあれど、もの恥づかしくてともかくもあひしらひたまはず。

御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。禄の物、上の命婦取りてまゐれり。白き大袿、御装束一くだり、例のことなり。御盃のついでに、

いとけなき初もとゆひにながき世をちぎる心は結びこめつや

心ばへありて驚かさせたまふ。

結びつる心も深きもとゆひにこきむらさきの色しあせずは

と奏したまひて、長橋より下りて舞踏したまふ。左馬寮の御馬、蔵人所の御鷹据ゑて賜りたまふ。御階のもとに親王たち上達部つらねて、禄ども品々賜りたまふ。

その日の御前の檜割子、折櫃物など、右大弁なん承りて仕ふまつらせける。屯食、禄の唐櫃などところせきまで、春宮の御元服のよりも数まさりて、なかなかかぎりもなかた。

加冠役の左大臣が、皇女との間にもうけて愛育なさっている一人娘、この姫君には春宮から入内のご希望がありながらも、それを渋っていらっしゃったのは、この君にさしあげようという志が深いためなのだった。帝にご内意をお伺いになると、賛意を示されて、「それならば元服の日にそのまま、これにあたっての後見もいないようだから、添臥に」と促されたので、左大臣もそのおつもりでいらっしゃる。殿上の間のご休憩所にご退出されて、人々がご下賜のお酒を召し上がっているときに、親王たちの御座の末席に源氏の君がおつきになった。左大臣がご結婚のことをほのめかされるが、気恥ずかしくて何ともお答えにならない。

帝から、内侍が宣旨を承って伝えることには、左大臣が御前へ参られるようお召しがあるので、参上なさる。禄の品は帝付きの命婦が取り次いで、さしあげる。白い大袿、ご装束一揃いという、通例のものである。帝は御盃を賜る際に、

幼い源氏の君が初めて結った元結に、あなたの姫君との末長い関係を誓う心も共に結びこめたのか。

ご意向をこめて念をお押しになる。

結びこめた私の志も深い元結でございますから、元結の紐の濃い紫色（源氏の君の御心）さえ変わりませんでしたら、末長く。

と奏上なさり、長橋から降りて拝舞される。左馬寮の御馬、

くいかめしうなんありける。

【18】源氏、葵上と結婚する

やがてその夜、大臣の御里に源氏の君まかでさせたてまつりたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづききこえたまへり。いときびはにておはしたるを、ゆゆしく美しと思ひきこえたまふ。女君はすこし大人びたまへれば、いと若くおはするを、似げなく恥づかしと思したり。

この大臣の御おぼえいとやんごとなくおはするに、母宮、帝の御后腹の皇女にて、当帝の御姉妹におはしければ、いづ方につけてもいとはなやかなるに、この君さへおはしそひぬれば、春宮の御祖父にてつひに世をまつりごちたまふべき右の大殿の御勢ひは、ただ今ものにもあらず圧されたまへり。

御子ども、腹々にいと多くものしたまふ。この宮の御腹のは、蔵人の少将にていと若くをかしきを、右の大臣、御仲はよからねど見過ぐしたまはで、いとかなしうしたまふ四の君にあはせたてまつりたまひて、劣らずもてかしづき

蔵人所の御鷹をとまらせて拝領なさる。御階のもとに親王たちや上達部が並び、禄を身分に応じて頂戴なさる。

当日に御前に献上される檜割子、折櫃物などは、右大弁がご指示を承って準備させた。屯食や禄の唐櫃なども置き場所がないほどで、春宮の御元服よりも数がまさっていて、かえってこの上もなく盛大であった。

【18】元服の儀に続いて、その夜、左大臣のお邸に源氏の君をお連れ申し上げなさる。婿取りの儀は類まれなほど立派で、熱心におもてなし申し上げていらっしゃる。まことにお年若でおいでになるのを、不吉なまでに美しいとお思い申される。女君は少し年長でいらっしゃるので、源氏の君が大変お若くていらっしゃるのを、不釣り合いで恥ずかしいとお思いである。

この大臣への帝のご信任はたいそう厚くていらっしゃるうえ、姫君の母宮は帝の后腹の皇女で、当帝のご姉妹でいらっしゃるので、ご夫婦どちらをとっても大変ご威勢華やかであるところに、この源氏の君までも婿に迎えられたので、春宮の御祖父としてゆくゆくは政治を掌中におさめられるはずの右大臣殿のご勢力は、今のところ問題にもならないほど気圧されてしまっている。

左大臣はお子たちを、あちこちの女性との間にたいそう多くもうけられている。この宮がおあげになったお子は、蔵人少将で大変若く立派な方なので、右大臣は左大臣方とご関係

【19】源氏、藤壺女御への恋心に苦しむ

源氏の君は、上の常におぼつかながり、召しまつはせば、心安く里住みもえしたまはず。心の内にもただ藤壺の御容貌、ありさまを類なしと思ひきこえたまひて、さやうならん人をこそ見め、世に似る人なくもおはしけるかなとのみ思ひありきたまふ。大殿の姫君、いとをかしげにてかしづかれたまへる人とは見えたまへれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心ひとつに置き所なく苦しきまでぞ嘆かしかりける。

大人びたまひて後は、あ(63)りしやうにも御簾の内などにも入りたまはず、御遊びなどの折々、琴笛の音に聞こえかよひ、ほのかなる御声、けはひばかり聞くを慰めにて、内裏住みのみ好ましくおぼえたまへば、五六日とさぶらひたまひて、大殿には二三日など絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は幼き御ほどによろづを罪なく思しなして、はかりもなく営みかしづきたてまつりたまふ。さぶらふ女房、童よりはじめて、世におしなべたらぬを選りととのへ、すぐり出でてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをよろづにおほなおほな思したるさま、おろかならず。

は良くないもののお見過ごしになれず、たいそう可愛がっている四の君に縁付かせさしあげなさって、左大臣が源氏の君になさるのに劣らずこの蔵人少将を大切にお世話なさっているので、どちらも理想的なご関係である。

【19】源氏の君は、帝が常に会いたがられ、お召しになってお側に置かれるので、ゆったりと自邸で過ごすこともおできにならない。心の中でもただ藤壺女御のご容姿やお姿を類もないとお思い申されて、「この方のような人をこそ妻にしたい。世にまたとなく優れていらっしゃることよ」とのみ絶えず思い続けていらっしゃる。左大臣の姫君は大変すばらしく、大切に育てられた人だとはお見受けするものの、心をひかれないとお感じになって、藤壺女御のことを幼心にも一心に、身の置きどころがなく苦しいほどに嘆かれているのだった。

元服なさってからは、かつてのように藤壺女御の御簾の中などにもお入りにならず、管弦の御遊びなどの折々に、琴笛の音に託して互いに心を通わせ、ほのかなお声や身じろぎの音ばかりを聞くのを慰めとして、内裏住みのみを好ましいとお感じなので、宮中に五六日と伺候なさって、左大臣邸には二三日などというふうに途絶えがちに退出なさるけれども、大臣は、今はまだ幼いお年頃なのでまったく悪気はないとご自分に言い聞かせられて、はかり知れず精を出してお世話申しあげていらっしゃる。お仕えする女房、童をはじめとして、

内裏には、もとの淑景舎を御曹司にて、故御息所の御方の人々まかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は修理職、内匠寮などに宣旨くだりて、二なく改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、〔64〕いとど池の心広くしなし、めでたく造りののしる。かかる所にも思ふやうなる人を具して住まばやと思ほしまさる。「光る君」とは、高麗人の愛でて付けたてまつりたる名なりとぞ。

《校訂付記》

1　原文「なけきおゝふ」。『陽明叢書』は「嘆き多う」、『源氏物語別本集成　続』は「嘆きを負ふ」と解釈する。格助詞「を」を「お」と表記する例は桐壺巻にはないため、本稿では「嘆き覆ふ」とし、嘆きを広く行きわたらせる意で仮に解釈した。ただし、「覆ふ」をこの意で用いる例は中古には確認できなかった。後考を俟つ。

2　「あつかひくさ」。「に（カ）」の上から「さ」を重ね書きする。同筆。

3　「きよら」。虫損があるが、「ら」と判読した。

並々でない者を選りすぐって仕えさせなさる。御心にかなうような催しを何かにつけて精いっぱい思案なさる様子は、一通りでない。

内裏では、母君のときからの淑景舎を御曹司として、亡き御息所の女房たちを散り散りにさせないで仕えさせていらっしゃる。御息所の里第は、修理職や内匠寮などに宣旨が下って、またとなくすばらしく改装おさせになる。もとからある木立や築山の佇まいが情趣にみちた庭であるのを、さらに池を広々と造りなし、立派に造営するのに賑やかである。源氏の君は、「このようなところに、理想とするような人と連れ添って住みたいものだ」との思いを強くされる。

「光る君」という称は、高麗人が感嘆してお付け申し上げた名であるとか。

4　「をとこみこ𛀁さへ」。第一種のミセケチであるため、「を」を削除して本文をたてた。

5　「御らんする に」。虫損があるが、「る」と判読した。

6　「まうに」と書き、「ま」の上から「ま」を重ね書きし、「う」にミセケチを附してさらに二重線で削除し、「に」の上から「り」を重ね書きする。ミセケチは第一種、訂正は同筆かと思われる。

7　「あなかちなる」の「なる」を擦り消して「に御」を書く。

8　「心ことに」。虫損があるが、「心」と判読した。

9　原文「され事もや」の「れ」の上から「る」を重ね書きする。

10 「きゝにくき事○〔とも〕」
11 「まかてなんし」の「し」の上から同筆で「と」と訂正。
12 「○〔なを〕しはし」
13 「まを〔をも〕りて」。第三種のミセケチであるため、訂正前の本文で校訂本文をたてた。傍記も別筆の可能性がある。後考を俟ちたい。
14 「おまひぬれは」の「お」の上から同筆で「た」を書く。
15 「まみなとも」。虫損があるが、「み」と判読した。
16 「○〔て〕くるま」
17 「いみしう」の「う」の上から同筆で「と」を書く。
18 「ふたからせ」の「から」の上から「から」を書く。
19 「〈判読不能〉」の上から「まとひ」を書く。
20 「給も」。第二種のミセケチであるため、「も」を削除して校訂本文をたてた。
21 「まして」の「して」の上から「いて」を書く。
22 「かなしかたし」の「かなし」を擦りけして「たえ」を書く。
23 「給に」の「に」の上から「に」をなぞり書き。
24 「きこへ○〔させ〕いつる」
25 「たてまへりせ」の「へり」を擦り消して「つら」を書く。
26 「はくゝまぬ心（カ）ほつかなさ」の「心（カ）」を擦り消して「お」を書く。別筆の可能性がある。
27 「つらくも」の「も」を擦り消して「お」を書く。
28 「まほうしう」の「うし」の上から「し」を重ね書き。
29 「かたしけなきにかりを」の「に」を擦り消して「は」を書き、「を」を擦り消して「に」を書く。
30 「おほされしも」。虫損があるが、「も」と判読した。
31 「□にいさゝかも」。□の字は虫損により判読できない。いずれの系統もほとんどの伝本が「世」とするため、これを補った。
32 「この○〔ころ〕あけくれ」
33 「やまとゆことの葉」。第二種のミセケチであるため、「の」を削除して校訂本文をたてた。
34 「御せ事」の「御」を擦り消して「おほ」を書く。
35 原文「心のをさまらぬ〔さりける〕」。ミセケチは第三種で、傍記と同筆。訂正前の本文で校訂本文をたてた。
36 「人に○〔は〕みえし」
37 「なつかしくりし」「く」の上から「か」を書く。
38 「かはし」を擦り消して「ならへ」を書く。
39 「ちきりせ」「り」を擦り消して「ら」を書く。
40 「見たてまつるに」。ミセケチは第一種のため、「に」を削除して本文をたてた。
41 「殿上人」を擦り消して「うゑ人」を書く。
42 「してゆるは」の「して」を擦り消して「きこ」を書く。
43 「ゝ（を）しめして」の「し」を擦り消して「ほ」を書く。
44 「へし」「し」を擦り消して「かめり」を書く。
45 「あさかれいの○〔御はかり〕けしき」。「御はかり」を補入した上で、擦り消す。
46 「△〈判読不能〉れさせ」の「△」を擦り消して「ふ」を書く。
47 「さふらふも」。第一種のミセケチであるため、「も」を削除して本文をたてた。
48 「さしならひてしますに」の「て」を擦り消して「おは」を書く。
49 「その○〔ころ〕こま人の」
50 「御か△〈判読不能〉」を擦り消して「みかと」を書く。

51 「△（左カ）大弁」の上から「右大」を書く。
52 「かしこきは△△〈判読不能〉にて」の「△△」を擦り消して「かせ」を書く。
53 「ゆ△〔かカ〕すゑ」の「△」の上から「く」を書く。
54 「ことに△〈判読不能〉」の「△」の上から「て」を書く。
55 「かし△（とカ）き」の「△」の上から「こ」を書く。
56 「なずならひ」とあって、本文不審。誤写や脱字等の可能性も考えられる。ひとまず「なずらひ」の誤写と解釈した。
57 「ものしふ△（をカ）」を擦り消して「おはします」を書く。
58 「御心さしも」の「も」の上から「は」を書く。
59 「かきりなきし」を擦り消して「ある事」を書く。
60 「いときなき」の「き」の上から「け」を書く。
61 「もとゆい」の「い」を擦り消して「ひ」を書く。
62 「はなやかにるに」の「に」の上から「な」を書く。
63 「ありしやうにも」。第三種のミセケチであるため、「も」を残して本文をたてた。
64 「~~いとゝ~~いとゝ」。第二種のミセケチであるため、「いとゝ」を削除して本文をたてた。

〈付記〉本稿をなすにあたり、陽明文庫文庫長の名和修先生より、当該資料への閲覧調査や公刊の申請・許可に際して、格段のご配慮とご指導を賜った。ここに心より御礼申し上げる。なお、本稿は、科学研究費補助金（若手研究・課題番号20K12938／若手研究（B）・課題番号17K13402）の成果の一部である。

（かわらい・ゆうこ　就実大学
／まつもと・おおき　関西大学）